

花

授業紹介 -教育の現場-

学生の課外活動&サークル紹介 Enjoy! 学生ライフ

注目される研究報告

シリーズ 恩師と語らう

活躍する卒業生紹介 “学びの先”

OBOG・教員によるコラム

基金関係のお知らせ

Campus Information

いまと
新潟大学の魅力と現在を発信

新潟大学季刊広報誌 [RIKKA]

2018.SPRING

NIIGATA UNIVERSITY
MAGAZINE

No.

24

特集

新潟発、日本酒学

世界初の

拠点形成を目指して

日本

日本

真の強さを学ぶ。



新潟大学



新潟発、日本酒学 世界初の拠点形成を目指して

特集

今年4月、新潟大学研究推進機構附置として、新潟大学日本酒学センターが設置された。目的は、新潟が誇る日本酒を学問対象にする国際的な拠点の形成と発展への寄与。世界初となる「日本酒学」の構築を目指す注目の取り組みを特集する。

新潟大学と県、 酒造組合が結集した 日本酒学センター

昨年5月9日、日本酒に関する文化的・科学的な幅広い分野を網羅する学問分野「日本酒学」の構築について、国際的な拠点形成とその発展に寄与することを目的に、新潟県、新潟県酒造組合、新潟大学の3者で連携協定が締結された。新潟大学では、この協定に基づき、今年4月に研究推進機構附置新潟大学日本酒学センターを設立。総合大学の強みを生かし、広範な研究・教育分野から教員が参加する形でセンターの運営に向かう。新潟が世界に誇る日本酒に対し、どのようなアプローチで取り組むのか。

取材に応じていただいたのはセンターの学内メンバーである、農学部の鈴木一史教授と経済学部の岸保行准教授。まずは設立の背景について聞いた。



農学部
鈴木一史 教授

経済学部
岸 保行 准教授

海外の一流レストランのメニューリストに並び、世界的にも注目されている今、センターのスタートはベストなタイミングだと考えています」（岸）

本センターは、新潟大学の10学部の教員が関わるのみではなく、新潟県と県酒造組合も学外メンバーとして参画する。実際に新潟らしい産官連携モデルだ。

「センター立ち上げ以前は、農学部と経済学部のメンバーが中心になり各方面に働きかけていましたが、現在は全学部から50名近くの教員が参加しています。研究推進機構附置という、全学レベルのセンターということで今までにない形で注目を集めていると思います。また、新潟県と新潟県酒造組合との密接な交渉を経て、3者連携協定を結びました。日本酒の発展に寄与する事業を展開することが目的です」（鈴木）

2018 SPRING vol.24

CONTENTS

- 03 特集 新潟発、日本酒学
世界初の拠点形成を目指して
- 08 授業紹介 -教育の現場-
- 09 Enjoy! 学生ライフ
- 10 注目される研究報告
- 12 シリーズ 恩師と語らう
- 13 活躍する卒業生紹介 “学びの先”
- 14 OBOG・教員によるコラム
- 15 基金関係のお知らせ
- 16 Campus Information

新潟大学SNS公式アカウントが更に充実！

従来のfacebookに加えTwitterとInstagramも公式アカウントがスタート。更に本学の取り組みや普段の様子、フォトジェニックな風景などをお楽しみいただけます。



Cover Photo

盛り上がる日本酒人気。新潟が誇る地域資源である日本酒を「日本酒学」として、文化的・科学的な幅広い分野で網羅し、その魅力を世界に向けて発信。全国規模の報道すでに熱い注目を集めている。

『六花』とは…

本誌のタイトルでもある『六花』とは、本学の校章のモチーフである“雪の結晶”を表す言葉。本学の校章は、シンボルマークであった学生章をモチーフに本学名誉教授 小磯 稔氏がデザインしたものです。



題字
野中浩俊(のなか ひろとし)氏
新潟大学名誉教授(教育人間科学部)。専門は、書道、富岡鉄斎研究。
現在は、岐阜女子大学 教授

日本酒学センター 所属教員の研究テーマ (抜粋)	
人文学部	原 直史(教授) 「酒造りの歴史」
教育学部	伊野 義博(教授) 「酒造り唄」
法学部	渡辺 英雄(助手) 「日本酒のマナー」
経済学部	岸 保行(准教授) 「日本酒の海外展開」
歯学部	岡本圭一郎(准教授) 「日本酒と健康」
理学部	西川 周一(教授) 「酵母の遺伝の研究」
工学部	岡崎 篤行(教授) 「日本酒と料亭・花街の文化」
農学部	鈴木 一史(教授) 「酵母の分離と日本酒開発」
農学部	三ツ井敏明(教授) 「酒米品質の研究」
農学部	藤村 忍(教授) 「日本酒と美味しさの科学」
農学部	伊藤 亮司(助教) 「日本酒経済論」
脳研究所	武井 延之(准教授) 「アルコールと脳」



酒の陣で感じた 日本酒学への 期待の高さ

毎年3月、新潟の日本酒に対して大きな潮流を感じる2日間がある。新潟を代表するイベントでは、新潟の約90の酒蔵の地酒500種類以上を新潟の多彩な料理とともに味わえる。回を重ねることに来場者が増え、2018年は2日間で約14万人が来場。県外はもちろん海外からも注目される日本酒のフェスティバルだ。会場では多様なステージイベントやセミナーが実施され、

「対象学部は新潟大学の全学部と全学年です。第1学期の『日本酒学A・1』では日本酒の基礎的な事項、「日本酒学A・2」では発展的な事項についてそれぞれ解説します。そして第2学期の『日本酒学B』はさらに理解を深める実践的な講義になります。こちらは20歳以上を対象とした集中講義で、酒蔵や醸造試験場の見学、利き酒などを行います」(岸)

文化や伝統に根差した 日本酒を対象にする世界初の学問 総合大学らしく領域を横断する学びを提供



2018年3月9日、日本酒学センターの設置について記者会見を行い、多くの報道陣が駆けつけた

本センターで展開する事業の柱は4つ。日本酒に関する「教育」「研究」「情報発信」「国際交流」だ。まず教育については今年4月から日本酒学が開講された。日本酒学とは、広範な学問領域を網羅する「対象限定・領域横断型」で、日本文化や伝統に根差した日本酒に対する世界初の学問領域。総合大学としての強みを生かし、日本酒に関する領域横断的な体系理解を進め、座学のみならず、実習や演習を取り入れた主体的な問題解決型の学びを提供する。

また研究については、国際シンポジウムやセミナー、研究会を開催し、新潟を中心とした研究者ネットワークの構築を目指す。専門知識を共有・蓄積することで新たな研究成果を上げることが期待される。

情報発信は公式ホームページが中心。教育や研究に関する成果と報告をアップし、フェイスブックを活用しながら学内外へ広く届けていく。

国際交流のセクションでは、ワインの世界的な銘醸地であるフランス・ボルドー地域を観察。ワイン・ブドウ学で著名なボルドー大学を訪問し、今後の連携可能性を議論。さらに学内へ広く届けていく。



センター開所式と同時に開催されたキックオフミーティングでは、センターの構成員となる教員40名以上が日本酒学の今後について積極的な意見交換を行った

**センターが掲げる
4つの取り組み**

本センターで展開する事業の柱は4つ。日本酒に関する「教育」「研究」「情報発信」「国際交流」だ。まず教育については今年4月から日本酒学が開講された。日本酒学とは、広範な学問領域を網羅する「対象限定・領域横断型」で、日本文化や伝統に根差した日本酒に対する世界初の学問領域。総合大学としての強みを生かし、日本酒に関する領域横断的な体系理解を進め、座学のみならず、実習や演習を取り入れた主体的な問題解決型の学びを提供する。

日本酒学では どのような内容を 学ぶのか

論。さらに新潟を日本酒の銘醸地としていくためのヒントを得るなど、実りある交流が活発に行われている。

センターの根幹を成す日本酒学。学部や専門の領域を超えたアプローチに期待されるが、具体的にどのような対象を扱うのか。

「水・酒造好適米等の原料や微生物から醸造・発酵の知識と技術、そして日本酒が消費者の手に届くまでの流通や販売、マーケティングに関する領域、歴史や酒税、醸造に関する気候や風土、地理的表示保護制度などの地域性に関する領域、歴史や酒税、醸造技術、そして日本酒のたしなみ方や健康との関わりなど、日本酒に関連する非常に多岐に渡る領域になります」(鈴木)

「日本酒学部は新潟大学の全学部と全学年です。第1学期の『日本酒学A・1』では日本酒の基礎的な事項、「日本酒学A・2」では発展的な事項についてそれぞれ解説します。そして第2学期の『日本酒学B』はさらに理解を深める実践的な講義になります。こちらは20歳以上を対象とした集中講義で、酒蔵や醸造試験場の見学、利き酒などを行います」(岸)

ビールの祭典『オクトーバーフェスト』をロールモデルにしたこのイベントでは、新潟の約90の酒蔵の地酒500種類以上を新潟の多彩な料理とともに味わえる。回を重ねることに来場者が増え、2018年は2日間で約14万人が来場。県外はもちろん海外からも注目される日本酒のフェスティバルだ。会場では多様なステージイベントやセミナーが実施され、

新潟大学を世界に知らしめ 新たに国際的な知のネットワークと 研究が生まれる可能性も



2018年4月、記念すべき日本酒学が開講。初回の講義には定員300名に対し820名の聴講希望があり学生の期待も高い

使われる酒を『お神酒』というようすで、日本酒は我が国の文化と密接に関係しています。飲むだけではなく、知識として楽しむことも日本酒文化の発展に繋がる。また、日本酒を外からの視点で観察することにより得られる知識もあるはずです。日本酒の向こう側にある様々な事柄への期待を学生たちは感じているのではないでしょうか」（岸）

また、幅広い知識や視点を学生たちに寄与することにも繋がる

とふたりは続ける。

「日本民族が代々飲み継ぎ、日本に根ざしたものは、どんな場面

で使われ、どんな歴史があるのか。

それら日本酒の周辺情報を知ることで、日本文化を理解することに繋がるはずです。農学部の学生なら専門で学ぶ醸造や発酵の知識だけでなく、日本酒学で専門外の歴史や文化を学ぶことで、さらに深い学びになる」（鈴木）

「バックグラウンドの違う学生が集まり、日本酒を知識として語る場があることは非常に重要。知識が増えることで、お酒がよりおいしくなり、手に取る機会が増えます。日本酒は文化的な製品で、酒について語れる知識を持つた彼らは、卒業後に県外へ出たとしても、行く先々で日本酒の魅力を語るはず。草の根的ですが日本酒文化の底上げに繋がります」（岸）

セントラーセンターと 日本酒学の今後の展望

様々な領域を包括する形で、対象を日本酒に限定した新しい学問。酒を扱う学問は海外ではフランス・ボルドー大学のワイン学、国内では鹿児島大学の焼酎学が先駆的だが、いずれも主眼は醸造学に置かれている。新潟大学の日本酒学は全学の研究者が関わり、領域横断型で取り組むという点でも世界初のもの。海外に向けて発信するに足りるものだ。

「これだけの領域の話ができる先生がいらっしゃることが武器。今後はさらにセンターのメンバーも増えるでしょう。これまで農学部なら醸造学、経済学部な経営学と、日本酒を対象にした研究はあってもそれらは点の動きでした。しかし、医学部にはアルコールと脳、歯学部にはストレスと日本酒の関係を研究されている先生がいるなど、センターが存在することで日本酒に関わる情報を集約できる。そこには世界に向けて新たな研究が生まれる可能性もあります。世界初の日本酒学は新潟大学を広く世界に知らしめるインパクトがあるもの。同時に本学を中心とした日本酒の知のネットワークを国内外で作ることも目指していくきます」（鈴木）

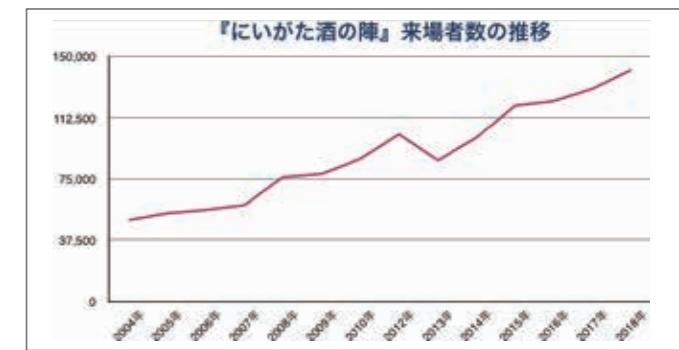
今年は新潟大学のセミナーも開催された。「セミナーには予想以上の人を集まつていただき、用意したチラシも全て配布されました。参加者の方には公開講座をやってほしい”東京でも講座をしてくれないか”ネット配信はしないのか”とい



2018年3月に開催された酒の陣では2日間で過去最高の140,000人が来場した



酒の陣の会場内で開催された日本酒学セミナーでは立ち見が出る盛況ぶりで、その関心の高さが伺えた



日本民族が代々継承してきたものを飲むだけでなく、知識として楽しむことは日本文化の発展に繋がる

学生たちの日本酒学への期待の高さが明確に表れたのが講義の聴講希望者の数だ。定員200名のところ、希望者の数は実際に820名以上。急きよ定員を300名に増やし、第1回の講義が行われた。学生たちの学びの心を刺激したのはどのような点なのだろうか。

「まず日本酒は人と人の縁を深める重要なツールだということ。それをアカデミックに考えるわけですから、これは学生でなくてもワクワクしますよね。神事の際にう好意的な話をたくさんいただきました。一般の方々から新潟の日本酒が注目されているのを感じています」（鈴木）



酒の陣のオープニングセレモニーにて高橋姿学長が新潟清酒名誉大使に任命され、来場者に日本酒学の設立に向けた意気込みが語られた

Enjoy! 学生ライフ

CAMPUS TOPICS

「国際交流のゆうべ」を開催しました

日頃から本学の国際交流にご協力いただいている地域の方々と外国人留学生・研究者および教職員が交流を図る平成29年度新潟大学「国際交流のゆうべ」を2月13日(火)に開催し、韓国駐新潟総領事館、地元自治体や各市民団体、地域の方々をお招きし、留学生、日本人学生、教職員ら学内参加者とあわせて228名が参加しました。

テーブルには、地魚の握り寿司や五泉里芋の芋煮、笹団子、新潟ではお馴染みの「ぼっぽ焼き」などが並び、留学生や日本人学生、地域の方々、教職員が交流の輪を広げていました。途中、全日本スピーチコンテストに出場した留学生による日本語スピーチや留学生と日本人学生による「インドダンス」と「ソーラン節」なども披露され、会に華を添えました。

また、新潟国際友好市民の会の方々による尺八や三味線の生演奏とともに「佐渡おけさ」などの踊りが披露され、最後の「新潟甚句」では、参加者も加わり会場全体に大きな踊りの輪が広がり、盛況のうちに幕を閉じました。

学部3年生・大学院1年生を対象とした企業等合同説明会を開催しました



教育・学生支援機構キャリアセンターでは、3月3日(土)・5日(月)・6日(火)の3日間にわたり、平成31年3月卒業(修了)予定の学部3年生・大学院1年生を対象とした「企業等合同説明会」を五十嵐キャンパス第一体育館に特設会場を設営し開催しました。

求人情報公開時期にあわせて平成13年度から毎年開催しているこの説明会は、特に昨年度から本学の地域創生への取り組みも踏まえ、県内企業等の認知を促進する新潟県の受託事業として、さらに県内企業等の参加の充実を図り実施しています。

今年度は3日間で企業・官公庁約400社に対して延べ約3,400人の学生がブースを訪問。採用担当者の説明に熱心に耳を傾け、積極的に質問を行いました。

参加学生からは、「たくさんブースを回ることができ、知らなかった会社を知ることができた」「新たな分野へ視野を広げることができた」「自分の学んでいる内容とぴったりの企業と出会えた」といった声が寄せられました。

CIRCLE PICK UP!

ラクロス部 朝練中心の部活だからこそ規則正しい大学生活

まだキャンパスが静寂に包まれる早朝、グラウンドに大きな声とクロスがぶつかり合う音が響く。ラクロス部は男子部51人、女子部26人の計77人が週の大半を早朝から練習に臨んでいる。男子は激しいぶつかり合い、女子は華麗なパス回しが見所だ。「男子と女子でルールが違うので基本的に別々に練習しています。ラクロス部がある高校は稀で、ほとんどの人が大学から始める初心者。フィジカルだけでなく戦略も重要な競技なので、体育系・文化系問わずこれまでの経験がプレイに反映されるところも魅力です。朝練が中心なので、毎朝早起き、練習が終わったら授業に参加し、夕方からはアルバイトや課題に取り組み大学生活が充実していることも実感できます」



新しい未来を、Denkaから。

できるをつくる。

Denka

デンカ株式会社 東京都中央区日本橋室町2-1-1 日本橋三井タワー
www.denka.co.jp

新潟大学の学生は、勉学のみならずサークル活動を始め様々な課外活動で活躍しています。このコーナーでは、そんな青春の1ページをお届けします!



高橋 直也 教授

Naoya Takahashi

Profile

博士(医学)。医学部保健学科副学科長。
専門は画像診断学・死亡時画像診断学。



意欲ある学生が伸び伸びと勉学に勤しむ

授業紹介

—教育の現場—

専門的な知識や技術の修得と、均整の取れた知識の獲得は教育の重要な役割。約5,000科目の中から特色ある授業を紹介。

vol.23・医学部保健学科



STUDENTS VOICE



左: 大杉勇輝さん
(医学部保健学科2年)

右: 宇賀田彩香さん
(医学部保健学科2年)

「実際にCTやX線の画像を見るのはこれが初めて。自分も将来的にこういう画像から一人で判断ができるようにならなくてはと思うと、すごくやりがいがあります」(大杉)
「先生と密接に関わることができ、分からない部分もその場で聞きやすい授業です。体の構造などをしっかり学んでいきたいです」(宇賀田)

が写していくのか理解するの非常に重要なこと。例えば、肺はこんな形なのに画像に写るところなるとか。それを対応させながら医療画像で見る体の構造を学習する講義です」

放射線技術の進歩は非常に早く、専用の医療機器もこの十数年で劇的に変わっています。そんな中、「現代の臨床技術にリアルタイムで即した授業にしたい。だから教材も新しいものにどんどん変えていきます」

「学生に対しては、将来、医療人として一緒に働いていく仲間のような気持ちで指導していきたい」と教授。線技師は実際にどんな仕事をし、何を重要としているかを目の当たりにしました。その経験が今後の指導に繋がります」

「理論が中心の座学とは違い、この講義は技師が現場で日常的に接する内容に近い。そういった点で、学生も面白いだろうし興味がわくのではないかと思います。私も以前は教科書をベースに講義をしていましたが、3年前からこのように実際の臨床画像を見て勉強する形に変えました。私は一般病院で医師として働いていた期間が長く、その間、放射線技師は実際にどんな仕事をし、何を重要としているかを目の当たりにしました。その経験が今後の指導に繋がりました」

ITをもっと身近に、
もっと快適に。

株式会社 NS・コンピュータサービス

〒940-0045 新潟県長岡市金屋3丁目3番2号 [TEL] 0258-37-1320 [URL] http://nscs.jp
OB・OG 多数活躍！ インターンシップ受付中！ [MAIL] sainyou@nscs.jp

N.S.
N.S. COMPUTER SERVICE CO.,LTD.

注目される研究報告

新潟大学では、伝統的な学問分野を継承するとともに、専門分野を超えて連携し合う研究や、先端的な研究など、真理探求や社会の発展に貢献する研究を行っています。



コア・ステーション
新潟大学中小企業ナレッジネットワークセンター
有元知史 准教授

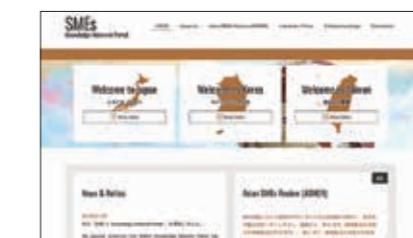
| Member | 右から李 健泳 教授、有元知史 准教授、伊藤龍史 准教授、張 文婷 研究員

研究課題 東アジア中小企業間のナレッジネットワークの構築

東アジアの産官学金士ネットワークを深化 中小企業の国際展開の機運を高める

新潟大学コア・ステーションは、学部や研究科などの学内組織にとらわれず、教員等のグループが高度な大学教育プログラムの開発や研究拠点の形成を目指して行う活動。その一つに中小企業ナレッジネットワークセンターがある。事業の目的に、「アジアにおける企業経営について制度や文化背景を含め比較研究を行い特性を見出すこと」「新潟大学と海外提携校のグローバル人材育成」「新潟と海外提携校の所在地の地場産業間の協力関係を築くための支援」をあげている。

将来的には中国やロシアの提携校も加え、環東アジアにおける経営学の研究教育および研究者・学生の交流拠点の構築を目指す。「研究・教育の成果を地域活性化に繋げ、国際的な産学連携活動に発展させたい。大学や学生が中小企業と接点を持つことで、地域経済を多面的に見る視点が養われると期待しています。地域を支える人材育成にも貢献したいと考えています」



↑中小企業ナレッジネットワークポータルのトップページ
<https://sme-knet.org>



↑2017年2月に開催された国際シンポジウム



↑2017年12月の日本台湾協力のための交流



自然科学系(理学部)
梅林泰宏 教授

| Profile | 博士(理学)。専門は溶液化学。溶液中の状態、そこで起きる現象や機能について研究する

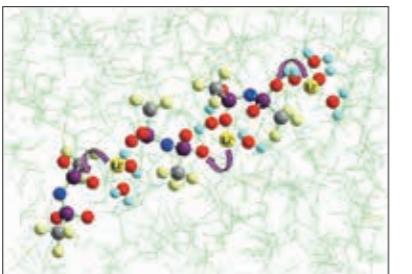
研究
課題

新たな液体が拓く新たなイオン伝導ダイナミクス

*イオン液体と内部で起こっている現象を研究 環境に優しい電解液開発を目指す

性があると話す。

「従来の電解質溶液論では、溶液に多量のイオンを溶かすことで電気的に中性になり、電流には寄与しないと考えられていました。しかし、私たちはイミダゾールと酢酸の等量混合物が高い電気伝導性を示すことを見出し、現在、この液体の構造解析や伝導メカニズムの解明に取り組んでいます。これは既存の理論では全く説明できない未知の溶液。従来のイオン伝導や拡散に関する概念から脱却する必要があると思います」



↑リチウムイオンが溶媒やマイナスイオンをはねまわる(ホッピング)と考えられている

ノートパソコンやスマートフォンに搭載されているリチウムイオン電池。軽量で小さく、大容量の電力を蓄えることができる特長だ。電池内にあるイオン液体の中のイオン伝導性が高くなるほど高い電力を得ることができる。

梅林教授はリチウムイオン電池内の溶液について研究。溶液に可視光やX線、中性子などを当て、反射・吸収された光を分析し新しいイオン液体と内部で起こっている現象を調べる。目指すのは、環境に優しく安全な電解液の開発と基礎理論の解明だ。教授が考える新しいイオン液体には、従来と異なる特異的なイオン伝導



↑溶液内のイオンの動きをシミュレーションを用いて可視化する

研究が進展すれば、持続可能な社会の実現に向けたエネルギーの開発とそれを供給する仕組みへの貢献が可能になる。

「エネルギー資源に乏しい日本では、発電・蓄電技術の研究開発は極めて重要な課題。大きな電気を効率よく作る一方で、大容量の電気をためることも必要です。必要な量をオンドマンドで供給する仕組みが模索されていますが、大都市でも安全かつコンパクトに大電量を蓄えることが求められている。イオン液体は、イオンだけできているので水のように蒸発せず、火力発電のようにCO₂を出さないので地球環境に優しい。また、引火や爆発の恐れがないので、究極的に安全な電気だと思います」

持続可能な社会を作るためには、環境に調和したエネルギー開発が必要。これも科学の重要な課題だ。

「私たちの基礎研究が発展すれば、まず原発が不要になるでしょう。将来的には世界中のエネルギー全てを電気にする可能性もあると期待しています」

※1990年頃に発見されたイオンだけからなる室温で液体の物質



↑研究施設での実験の様子。溶液に様々な光を当て、内部で起こる現象を分析する

企業の技術向上を目指す産学官交流ネットワーク

新潟大学産学連携協力会

新潟大学地域創生推進機構と産業界等が密接に連携し、
産業の活性化、高度化、地域社会の発展を目的に
技術の向上及び地域連携を図ります。

詳細をお知りになりたい方、加入ご希望の方は、ホームページをご覧ください。
[新潟大学産学連携協力会](http://www.ircp.niigata-u.ac.jp/kyouryokukai/)

お問い合わせ先 新潟大学産学連携協力会（新潟大学地域創生推進機構内） TEL 025-262-7553 FAX 025-262-7577 Email unico@cer.niigata-u.ac.jp

主な事業

- 講演会
- セミナー
- 研修会
- 技術相談
- など

<http://www.ircp.niigata-u.ac.jp/kyouryokukai/>

新潟大学附属図書館

学術書・専門書多数。地域に開かれた明るく開放的な図書館です。
卒業生・一般の皆様もお気軽にご利用ください！

貸出用の図書館利用カード作成できます

- 貸出期間 2週間
- 貸出冊数 新潟大学カード会員：図書10冊
- 卒業生：図書5冊
- 一般の方*：図書5冊 *新潟県内在住18歳以上の方が対象

開館時間：平日 8:00～22:00
土・祝日 10:00～22:00
※学生休業期間については開館時間を短縮します。
※本学の定期試験期間中は、閲覧席利用をお控えください。
休館日：年末年始等

開館スケジュールや利用方法は
附属図書館ホームページをご覧ください。

新潟大学 附属図書館 検索

Campus Information

地域に密着しながら様々な活動を続ける新潟大学。皆さんにお伝えしたいニュースはたくさんあります。

第2回新潟大学リエゾンプロフェッサー・アセンブリーを開催しました

環東アジアを基点とした国際ネットワークの構築と強化の一環として昨年より、海外の大学等に勤務する教員・研究者で本学の国際交流に大きく貢献されている方に「リエゾンプロフェッサー」の名称を付与し、本学の更なる国際ネットワークの構築・推進にご協力いただいています。今年度は新たに7名の方々に名称を付与しました。

これに併せ、2月28日(水)には上記7名に加え、昨年欠席した1名を本学に招聘し、「第2回新潟大学リエゾンプロフェッサー・アセンブリー」を開催。旭町キャンパス有壬記念館にて開催された本会合では、本学の国際戦略やグローバル化の現状の報告とともに、リエゾンプロフェッサーからそれぞれの新潟大学との交流・連携に関する活動について報告されました。自由討論では、本学と協定締結大学が単位互換制度を利用して、双方の大学がそれぞれ学位を授与するダブルディグリー・プログラムの現状と課題など、活発な意見交換が行われ、今後の更なる国際ネットワーク強化の推進に向けた有意義な機会となりました。



アジア大気汚染研究センターと連携協定を締結しました



一般財団法人日本環境衛生センター アジア大気汚染研究センター(以下ACAP)と、3月19日(月)に連携協定を締結しました。ACAPは東アジア13カ国61地点の大気環境のモニタリングネットワークを有する国際的なセンターであり、日本海側最大規模の総合大学である本学との連携によって、大気汚染問題をはじめとした、環東アジア地域での課題の解決に寄与することが期待されます。協定式において、高橋学長は「ACAPとの連携によって、新潟大学の第3期中期目標・中期計画における重要な戦略ビジョンである『環東アジアネットワーク構想』について、これまで以上の推進を図り、環東アジア地域の課題解決に向けた取り組みを強化したい」と述べ、ACAPの坂本所長は「この連携協定は、東アジアの地域社会、その中核としての新潟県・新潟市の地域にも、様々な形で貢献できる可能性を秘めている」と語りました。

また、平成30年度よりACAPと本学大学院自然科学研究科において、高度な研究水準を持つ外部機関と連携した教育制度である連携大学院を設置し、東アジア地域の大気汚染に関わる分野での研究拠点化を目指します。

阿賀野市と健康寿命延伸・消化器疾患先制医学講座に関する協定を締結しました

阿賀野市の寄附により設置する「健康寿命延伸・消化器疾患先制医学講座」に関する協定を、3月26日(月)、阿賀野市役所において締結しました。この寄附講座は、阿賀野市民の健康寿命を延ばすための施策立案を、科学的かつ効果的に進めるための研究を行うものです。協定締結式では、医歯学総合研究科消化器内科学分野の寺井 崇二教授が、消化器疾患に対する先制医療の必要性や、阿賀野市の人団動態などから見える課題などを解説し、寄附講座の意義を発表しました。高橋学長は、「消化器疾患先制医学という名前の講座は日本で初めて。新潟大学も十分サポートし、阿賀野市民の健康寿命延伸に寄与するよう努力していきたい」と寄附講座への思いを述べました。

